

言葉の分からぬ国で得た 思わぬ縁と人の優しさ

不思議な巡り合わせで、青年海外協力隊をしていたところに読んでいた本誌の記事を書くことになった。私が協力隊として活動したのは2013年3月から15年7月だから、いささかご無沙汰していた事になる。隊員としてモザンビーク北部のナンブラで過ごしたのは2年4カ月間、首都にある日本植物燃料マプト事務所に着任した15年11月から数えても2年以上が経過し、モザンビーク在住歴は足掛け5年になろうとして



モザンビークの農家と共に土地を耕す。国内労働人口の8割が従事する農業は、大きな可能性を秘めたセクターだ(右から2人目が筆者)



協力隊時代の筆者(中央)。ナンブラ中央病院の同僚たちと。右がマリニーヨさん

の存在は非常に大きかった。彼はポルトガル語もままならない私を、週末しばしば飲み誘ってくれたのであった。最初はたかりに来ていのかと警戒したが、彼は「誘ったのは自分だから」と、自分からビールをおごってくれた。もともと、人のおごりで土曜の午前中からビールを飲むため、昼過ぎにもかかわらず彼の美家でトイレとお友達になってしまっただけで、別の意味で警戒するようになったが、盛大な歓迎会を開いてくれたわけでもなく、市場の片隅にある飲み屋や彼の美家で、私と彼、時には同僚や友人、家族も交えて飲み食いしただけの仲であったが、片言でしか話せない外国人を受け入れる鷹揚さ、

いる。この地での生活を通して、私はモザンビークがすっかり気に入ってしまった。開発途上国での仕事や生活、開発協力への興味を捨てきれず、医療機器メーカーを辞めて協力隊に応募した当時、配属希望どころか思い浮かぶこともなかったモザンビークの案件を担当させてくれたJICAには感謝するほかない。

協力隊時代に私が活動したナンブラ州ナンブラ市では、街を歩けばアジア人を揶揄する「チンチョンチャン」という言葉を掛けられ、街中にはスリ多発地帯もあった。そんな環境でも、人は徐々に適応していくものだ。相手と目を合わせ、スリかどうか予想して華麗に身をかわす

41 Voice

日本植物燃料株式会社
マプト事務所

松永 篤

アフリカで探すチャンス の女神

Profile
まつなが・あつし
1984年、東京都生まれ。2007年から2012年まで医療機器メーカーに勤務した後、2013年より青年海外協力隊医療機器隊員としてモザンビーク共和国ナンブラ州のナンブラ中央病院に赴任。任期終了後は、日本植物燃料株式会社の駐在員としてモザンビークのマプト市でビジネスを展開している。

優しさ、ホスピタリティーといったものに感銘を受けたのだ。

協力隊としての活動が1年を過ぎようとしていたころ、マリニーヨは首都に開校した医療機器技術者養成学校の1期生として、ナンブラの病院からただ一人派遣された。技術者養成校の設立と生徒募集の話聞いた彼は、自ら部署の上司に訴えて応募し、一介の電気技術者から医療機器保守管理技能を身に付けた技術者へとステップアップする機会を得たというわけだ。チャンスは女神には前髪しかないというが、彼は目に入った女神を逃さず、その前髪をつかんだ。一番に打ち解けたマリニーヨがチャンスに恵まれた事は私も心からうれしかったし、豊かな人間性を持った彼のような人がこれからもモザンビークの医療に携わっていつてくれることを強く願った。

チャンス を求め人々と ビジネスの可能性を探る

その一方で、なぜ彼があれほど私に親切にしたのかも納得できた。彼はチャンスを探っていたのだ。新しいことに挑戦するきっかけ、チャンスは女神との出会いを求めて、日本から来て慣れない場所でおどしている私と接点を持つようになったのだろう。実は、以前からJICAは対モザンビーク技術協力の一環として医療機器の保守管理技術者に対する研修を実

などの小さな成功体験を通じて、自身に関する新たな発見の喜びや、生きている実感のようなものを感じる事ができた。モザンビークは私にとって初めて住む異国であり、言葉の壁や慣れ親しんだ環境との違いゆえに、自分自身や周囲に対する感覚や認識が鋭くなり、結果として新たな発見につながったのではないかと思う。

地元の人々とのふれあいからも多くのことを学んだ。私の配属先はナンブラ市内の公立病院で、病院設備や医療機器のメンテナンスを担当するセクションだったため、必然的に職場の同僚である技術者たちと交流を持つ事が多かった。中でも、マリニーヨという名の若い電気技術者

施しており、われわれが働いていたナンブラ州の公立医療機関にもその研修の経験者がいた。彼がその事を知らないはずはないが、特にそれについて聞かれたことはなかった。それは彼がそのような機会を渴望していながらも、どのようにチャンスを手元に引き寄せられるか、どうやったら実現に向けて進んでいけるかが分からなかったからだと私は解釈した。

私をモザンビークにいざなったのは保健医療という分野だったが、協力隊の任期を終えるころには、社会福祉や公衆衛生のようなセーフティネットを求める層よりも、むしろ機会をつかもうとする人たちと一緒に歩み、彼らをチャンスは女神と引き合わせられるような仕事をしたいと思うようになった。あえて民間企業の一員として、モザンビークと関わり続ける道を選んだのは、それが理由だ。

私が現在所属している日本植物燃料株式会社は、農村部向けにITを活用した決済・金融サービスの提供を目指している。モザンビークの農村部には大きな伸びしろがあり、今この地で活動している商業農家や農業関連企業、金融機関などはもちろん、ブロックチェーン技術を応用したクラウドファンディングサービスを始めたいというイギリス人、市場の売り子が使える、国内外の野心的な起業家も注目している。そのようなフィールドを舞台に、多くの人と手を携えて、チャンスは女神を探していきたい。

※「Voice」の内容は、筆者の個人的見解に基づいています。